

# . 日本型東洋医学の原点

## ■ はじめに

『言葉を越えて存在そのものを理解する』という意志が東洋医学の治療家には必要です。その意志のみが汗牛充棟の古典の山を乗り越えて患者さん自身の心身から直接学び取る姿勢を保証するからです。

この文章では江戸時代初期から中期にかけて、日本文化が開花した時代の精神を学びます。それは、江戸時代初期の求道者たちがいかにしてその当時の古典である朱子学を乗り越えてあるいは陽明学へあるいは国学へあるいは石門心学へと「自身のリアリティ」を確立し表現できるようになっていったのか、ということをお学ばせたいです。

真理を探究する燃え上がるようなその情熱とその姿勢を学ぶことを通じて、現代古典の集積とされている中医学を乗り越えていきましょう。そしてそれが患者さんから直接学ぶための技術である、一元流鍼灸術を行ずるための基本姿勢を学ぶということにつながっていきます。

この文章の構想は、平成 27 年にまとめられ、一元流鍼灸術のメインコースで披露されたものに、私が手を加えたものです。

平成 28 年 初春

伴 尚志

## ■ 目次

はじめに

解題

反知性主義

沢田健(1877年～1938年)

『難経鉄鑑』

凌耀星の三焦論

一団の元気: 広岡蘇仙の難経解釈

古典を読む姿勢

広岡蘇仙にいたる師弟関係

江戸時代の反知性主義

近江聖人: 中江藤樹(1608年～1648年)

求道の儒者 熊沢蕃山(1619年～1691年)

武士道を説いた—山鹿素行(1622年～1685年)

商人に道を説いた石田梅岩(1685年～1744年)

文字の糟粕を乗り越えるために

おわりに

参考文献

付: 味岡三伯考

## ■ はじめに

今回私がお話しするものは、「日本型東洋医学の原点」についてです。日本型東洋医学というと、平安時代に丹波康頼によってまとめられた「医心方」を思い浮かべる方も多いと思います。が、今回は江戸時代初期 100 年間ほどのできごとが中心となります。

その理由を以下に五項目にわたって述べておきます。

1、「医心方」は丹波家代々に伝わる書物にすぎず、大衆的に論議されたものではありませんでした。

2、医学がはじめて市井の学問となったのは、江戸時代であり、その源流は室町時代に田代三喜が明への留学から帰国してもたらした、明医学にあります。日本に伝承されていた「医心方」が日本医学の源流とはならず、明留学によってもたらされた明医学がどうして日本医学の源流となったのでしょうか。そこには、日本の学問流布の閉鎖性という大きな問題が横たわっているということが理解できるでしょう。このことは、中医学が流入することによって始めて、古典の原点に（簡体字が中心ではありますが）触れることができた、現代の日本の東洋医学が多いということにも通底するものがあります。江戸時代の初期までは、書物は特権階級のものであり、代々受け継がれるものにすぎなかったわけです。

3、田代三喜が伝えた明医学を実学として使える医学とするために、彼の直系の弟子たちは格闘し続けました。その求道の姿勢は中医学を実学とするために格闘している我々が真剣に学ぶべき価値があることです。曲直瀬道三はその治療効果の高さから幕府のお抱え医師となり、以後代々江戸時代の終わりまで、幕府お抱えの医師として活躍しました。

4、朱子学の理気二元論を、万物一体の仁の観点から乗り越えた王陽明と同じように、中江藤樹は万物一元の理として乗り越えています。この根源には、禅の悟りである、自他一体の体験があります。これはどうぜん、気一元の生命観を産み出すものであり、この視点が徐々に医学にも浸透していきました。当時、多くの儒学者が医学を生業としながら儒学を行っていました。そのような環境の中で、実学としての儒学を探究することを通じて、気一元の生命観が日本での常識として育まれることとなったのでしょう。日本の東洋医学の人間観はここに育まれていったと私は考えています。

5、前記したように、陽明学の致良知と、禅の悟りの一点と、神道における禊祓とは「共通する一点」を指し示しています。それは、「自分自身の本体を磨き出す」ということで

す。自分自身の本体を磨き出すことによって、自らの良知を鏡として人生を生きていく、それが陽明学における道を歩むということです。今この瞬間のリアリティをつかむということの中に禅の悟りの本質があります。それは自分を抜けて世界の中に落ちていく、世界が自分の本質であり自分はその中で生かされている生命にすぎない。そういう自覚。そこにおいて、自他は一体のものであり、自分の痛みは他者の痛み他者の痛みは自分の痛みであるという、大いなる生命のつながりを自覚することです。その一点に気付くことが悟りであり、その一点に気付き続けることが禪であり、その一点を鏡として今を生きていくことが致良知ということになります。そして江戸時代の人々は学者も含め多くが、このことに気がつき、それを内面で探究し、それを表現しながら生き、読み、書いていたように感じます。単なる学者ではなく、生命の学問—生きていく上で役に立つ学問—をしていたわけです。その中ではじめて気一元の身体観が育まれたわけです。

今回の話の目的は、「言葉を越えて存在そのものを理解する」 — 江戸時代初期の求道者たちの姿勢から一元流鍼灸術を行ずるための基本的姿勢を学ぶ — というものになりました。

いわば、これからの東洋医学を構築していくための「志」をどこにおくのかということ、先人に学ぼうというわけです。

この話の端緒は、澤田健にあります。私が鍼灸学校に入りたての頃に何回も読んでいた書物『鍼灸真髓』に描かれている鍼灸師です。彼はそこで、「死物の古典を以て生ける人体を読むべし」と述べています。

彼が教科書とした書物『十四経発揮』『和漢三才図会』『難経鉄鑑』の三種類のうち、前の二つは現在も我々が学んでいる臓腑経絡学に相当します。『難経鉄鑑』は『難経』の解説書です。けれども単なる解説書ではありません。そのなかで、気一元の身体観が述べられているのです。テキストにもある六十六難の図は、その気一元の生命の構造が表現されているものです。澤田健は、この図を毎朝黙座して眺めつづけると、すごいことがわかるよと教えていました。

今回お話しすることはこの「すごいこと」に関する歴史的な視平ということになります。そしてそれこそが実は、日本的東洋医学の核である気一元の身体観そのものなのです。

直接的な登場人物は、『難経鉄鑑』の著者である広岡蘇仙とその道統ということになります。けれどもその時代精神をより明確に表現しているものとして、時代精神の鼻祖である中江藤樹、その弟子の熊沢蕃山、君子の学として同時代に武士道を唱道した山鹿素行、そして、彼等の学び方をまっすぐに伝承して表現している石田梅岩を紹介します。

「志を立てる」激しさの大切さについて、考えてみたいと思います。

## ■ 解題

この文章は、いくつかの伏線で構成されています。

一つは、日本意識の目覚めの時代が江戸時代初期でありそれは、言葉を越えて存在そのものをみよとする意志によって推進されたということです。そしてこの意志は米国における基本思想である「反知性主義」と非常によく似ているということです。これが二つ目。この時代の成果として京都の味岡三伯医学塾が到達した地点として、気一元の身体観があります。そのことを明確に示しているものが『難経鉄鑑』です。『鍼灸真髓』で代田文誌によって描かれている大正時代の鍼灸師沢田健が称揚した『難経鉄鑑』はまさに日本の核をなす医学思想を表現していたものだったわけです。これが三つ目です。

一元流鍼灸術はこの「臍下丹田を中心とした気一元の身体観」にしたがって、生命の弁証論治を武器として、生命力の動きの側から人をとらえ養生治療を基本とした鍼灸治療を行なっていこうとしています。その基本思想—日本医学の到達点をわがものとするために、当時の学者達の志の持ち方を学ぼうということから、何人かに登場してもらい、その学問を進めていく意志の強さを学ぼうとしています。これが四つ目の伏線となります。

さらに言えば、この臍下丹田を中心とした気一元の身体観は、『難経』の作者のもっとも述べたかったことなのではないだろうかと考えています。すなわち「仏教の身体観で黄帝内経医学を解釈しなおしたかった」ということが、『難経』の作者の真の意図であろうということです。

言葉を越えて存在そのものにただ肉薄していく。その「生命力の盛衰の側から」疾病をとらえ、治療していく、そのような人間理解のできる鍼灸師になることを、一元流鍼灸術では目指しています。そしてその源流は江戸時代の初期、日本人が日本に目ざめた時にありました。

我々はこの目覚めの意志を学びます。それを通じて東洋医学は、普遍的な養生医学として甦っていくこととなるでしょう。

## ■ 反知性主義

反知性主義という言葉聞いたことがある方もおられるでしょう。これは、言葉で積み上げられた知識を乗り越えて、リアリティの世界に知の根拠をおく姿勢です。そしてこれは現代のアメリカにおいてその知の根拠となっているものです。

「浮き世離れたなまっしろいエリートの机上の空論より、現実に根ざした一般庶民の身体感覚に根ざす直観こそが貴いという考え、それこそが反知性主義の基盤だ。しかもそれはアメリカにおいては、建国の理念の一部ですらあり、その後のアメリカの世界支配の足がかりでさえある。」(1)

アメリカ人ぬんはともかく、反知性主義は、歴史を乗り越える力を与えてくれる、根源的な知の方法を提示しているように見えます。そしてこれは、現代において我々が東洋医学の古典という言葉の集積を乗り越えていくための指針を与えてくれる可能性があります。

その理由は、反知性主義というものが、文字として書かれているものや概念の定義を信頼して満足している、「知識人」たちへの批判の言葉だからです。

言葉が言葉として発生する以前の思い、言葉として発せられる以前の体験を重んずる姿勢が、反知性主義という言葉には込められています。これは、知に対する誠実さ、事実を知に優先させる検証し続ける臨床家にとって、なくてはならない発想です。

このような意味での反知性主義者の言葉を私は若い頃に読んだことがあります。それは、「書物は死物なり。死物の古典を以て生ける人体を読むべし。」(2:『鍼灸真髓』11p)という言葉です。この言葉は、名人と呼ばれた鍼灸師、沢田健が常々語っていた言葉でした。

## ■ 沢田健(1877年～1938年)

沢田健は、大正時代から昭和にかけて、名人と呼ばれた鍼灸師です。

彼は、鍼灸古道の奥義を把握したという自覚の下、さらにその「鍼灸古道の真価を全世界に顕揚し、失われたる東洋医道の名譽を回復し、西洋医学の誤りを正して、以て天下蒼生をして生の楽しみを享受せしめんとする」(2:『鍼灸真髓』10p)ことを志していました。沢田健は、古代の鍼灸道の奥義を見いだしたという自覚にのっとり、東洋医学の真価を世界に対して明らかにして、西洋医学の欠点を正すことを目指していたのです。そうすることによって天下の人々が皆、生きる喜びを享受できるようにしようと考えていたわけです。

彼の方法は後に太極療法と呼ばれ、澤田流鍼灸術として昭和鍼灸界に大きな足跡を残しています。けれどもおそらく沢田健はその流派名に満足することはないでしょう。何故なら彼は、自身の方法こそが西洋医学に対峙することのできる、鍼灸の本道であると考えていたのですから。

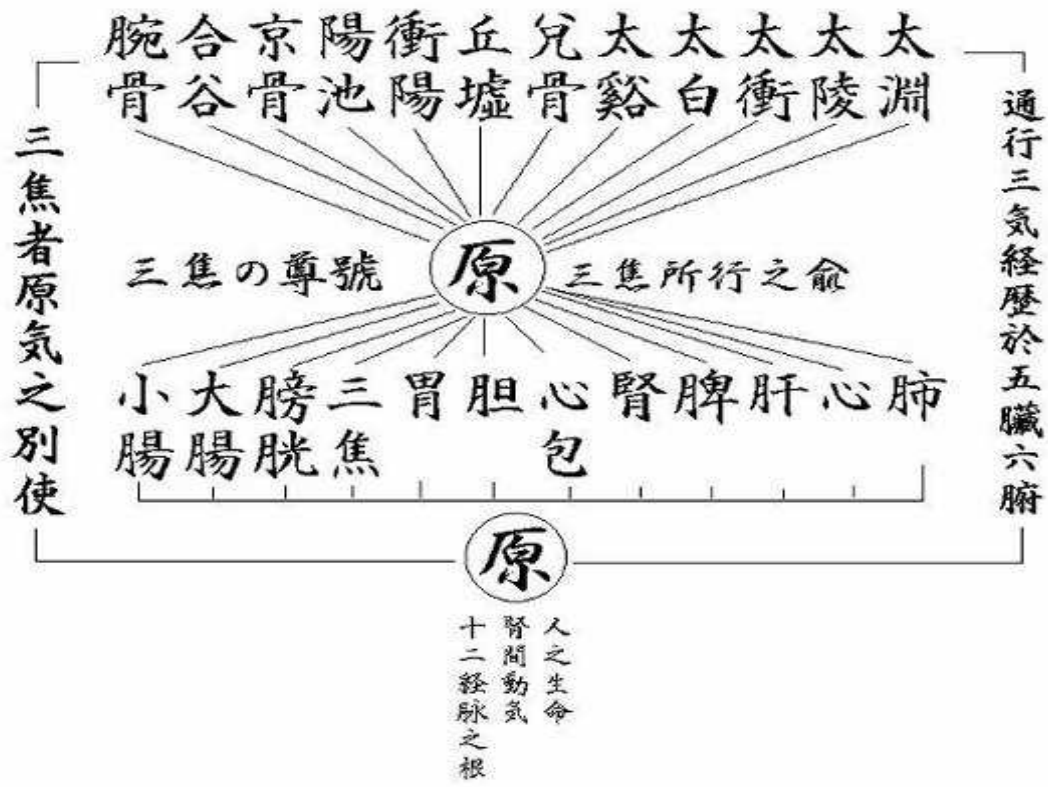
その沢田健が東洋医学の基本的な書物であるとして絶賛していたものに三冊あります。一つは『十四経發揮』であり、一つは『和漢三才図会』であり、もう一つが『難経鉄鑑』です。前者二冊は現代でも鍼灸師が学んでいる、臓腑経絡学の各論に相当します。それでは最後の書物、『難経鉄鑑』は何を表現している書物なのでしょうか。

## ■『難経鉄鑑』

『難経鉄鑑』の六十六難の図には、東洋医学的な生理的な人間の構造を示した一つの身体観が描かれています。腎間の動気と三焦と原穴との関係を示しているその図は、江戸時代の中期、1700年代前半に広岡蘇仙(1696年～没年不詳)によって描かれたものです。

# 六十六難

## 十二原



每早對六十  
六難圖。默  
坐省察原氣  
之流行榮衛  
之往來。而  
知身中之一  
太極。則自  
貫穿萬象之  
妙契。

広岡蘇仙は井原関を師とし、1713年から3年間、京都で『難経』を学んでいます。彼は帰郷して地元の河内で開業しながら、『難経』の講義をするために1729年に『難経鉄鑑』をまとめました。その書が弟子達に乞われ出版されることとなったのは1750年のことでした。



井原閔というのは井原道閔(1649年～1720年)のことでしょう。彼は、京都で広く医学講習を行っていた二代目味岡三伯の弟子であり、四傑と呼ばれた一人です。彼には『医学三蔵弁』という書物があったといわれていますが、現存はしていません。けれどもおなじ二代目味岡三伯の弟子であり四傑の一人である岡本一抱に『医学三蔵弁解』という書物があるので、その内容をうかがい知ることができます。味岡三伯一門の中では当時このような「臍下丹田を中心とした難経の三焦論を基にした気一元の身体観」が広く論議されていたのでしょう。

この当時の大陸の医学状況はどうだったのでしょうか。

広岡蘇仙より少し時代をさかのぼりますが、明末の大医学家である張景岳(1563～1640年)の三焦論にはまだ、このような一つの身体観を提示しているものはありません。張景岳の名著『景岳全書』ではその冒頭に〈伝忠録〉という項目をおいています。その「伝忠」という言葉の意味は、医学の「中心を伝える」という意味だと張景岳自身が述べています。伝えるの「伝」と中心を縦に組み合わせて「忠」。それをならべて「伝忠録」と名づけているわけです。けれどもそのような重要な篇の中にも、『難経鉄鑑』で示されているような「一なる身体観」はまだ示されていないのです。

広岡蘇仙と同時代の徐大椿(1693～1771)が1727年に書いた『難経』に対する批判的な解説書に『難経経釈』という書物があります。臨床家として高名な徐大椿であれば何らかの身体観のようなものが示されていてもよいのですが、そこに書かれているものは、『難経』の条文と『黄帝内経』の条文とを比較検討し、『難経』の条文を批判しているものに過ぎません。いわば、黄帝内経教条主義とでも言えるものがそこにあるだけです。『難経』の著者が目指していたであろう身体に対する好奇心、身体を観ることで始めて得られる『黄帝内経』を超越した見解への好奇心などは、そこにはみじんも見ることができません。

『難経鉄鑑』のような全体観に至った難経解釈をみることは実は、現代中医学を広く眺めてみても手に入れることができないものなのです。

試みに現代中医学者の俊英と言える、凌耀星の『難経校注』を見てみましょう。彼女はその中でとくに章を設けて三焦論について述べています。

## ■ 凌耀星の三焦論

教科書として逐語的な解釈をしている書物が多いなか、凌耀星の『難経校注』は現代中医による書物として秀でたものであると言えるでしょう。その三焦論は以下のようにまとめられています。

1、手の少陽三焦経は十二経脈の一つである。経脈が循環し流注している過程で、血気は手の心主の脈から手の少陽三焦経に注ぎ、手の少陽から足の少陽胆経に注ぐ。手の少陽の原穴は陽池に出る。

2、三焦は六腑の一つではあるけれども、一つの独立した実質臓器ではなく、その形態や大小を述べることはできない。そのため、名ありて形がなく、同時に、その他の五腑が五臓に属するのとは異なるため、『外府』と呼ばれている。

3、三焦は形がないと言われているが、名称と部位はある。上中下の三焦にはそれぞれにある範囲がある。これは水穀の道路であり、受納したり、腐熟したり、精濁を分別し伝導して出すという運化の過程がある。これによって化生された精気は全身に提供される。このため三焦は気の終始する所であり、諸気を主るとされる。

4、三焦の気がめぐる所には止まる場所があり、これが十二経の原穴である。三焦は原気の別使であり、三焦の原は臍下腎間の動気にある。これをまた、生氣の原・呼吸の門・守邪の神と呼ぶ。ここはまた、十二経・五臓六腑の根本・人の生命の係る所である。

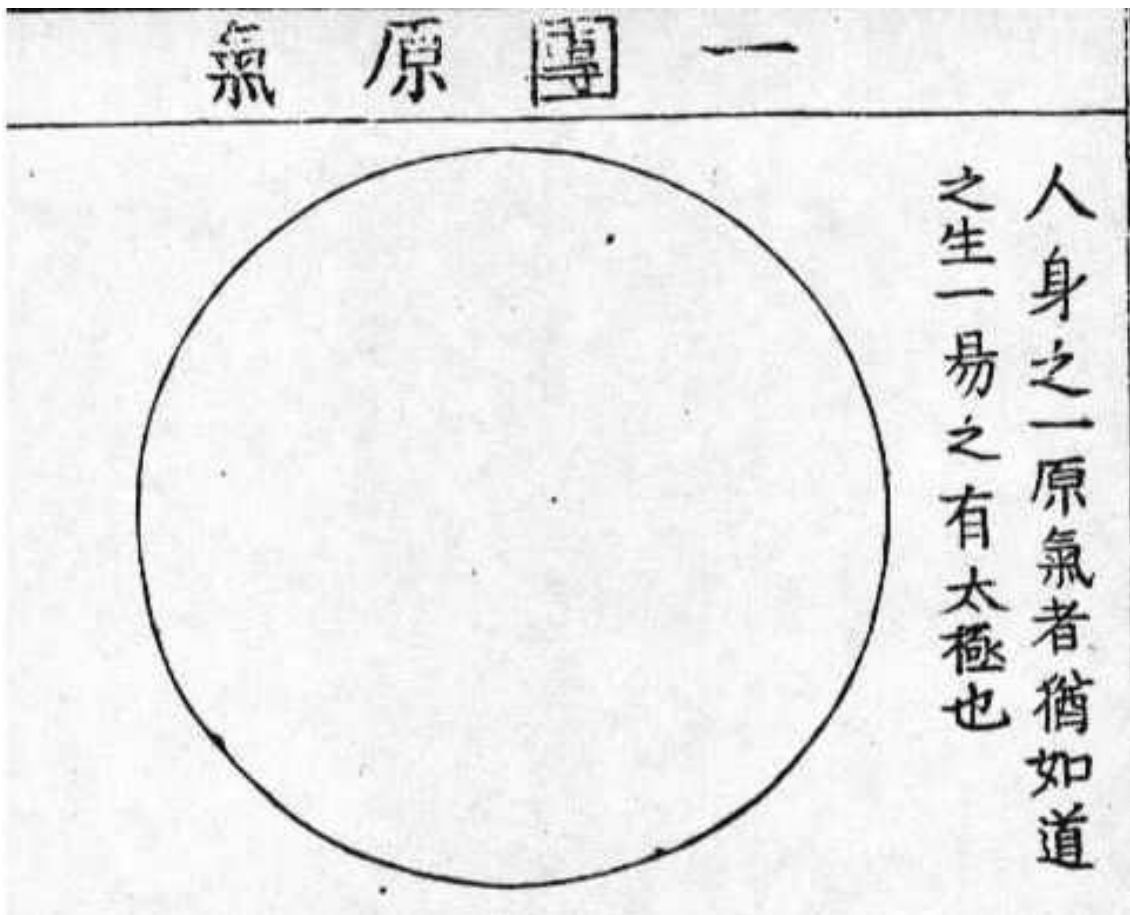
(『難経校注』116p 凌耀星著)

古典そのまま正確にしたがった記述です。そこには古典をこえるような意志はありません。けれども、学校であれば満点を得ることができるような無難な記述ではあります。

これに対して『難経鉄鑑』では、『難経』そのものが一元の気の変化を説いたものであり、その中心に腎間の動気があるということが明らかにされています。明確な身体観がそこに表現されているのです。

## ■ 一団の元氣：広岡蘇仙の難經解釈

『難經鉄鑑』のはじめには、図とその簡単な解説が置かれています。その中の「一団の元氣」と名づけられた円図の解説には、『難經鉄鑑』が書かれた意味と、広岡蘇仙による『難經』解釈の基本が提示されています。これを上記、凌耀星の三焦についての記述と比較してみましょう。書物を読む姿勢がいかに異なるか理解できるでしょう。



「一団の原氣が、百骸〔注：全身〕を弥綸している〔注：すっぽりと糊で封をしたように継ぎ目も見せず包みこんでいる〕状態の人は、健康な人です。もし少しでも充実していない部分があれば、それがすぐに病変を引き起こします。

そのような時には、その人の生気をその部分に誘い導くようにすることが、その治療法と

なります。

このような生気をうかがい知る方法が脈診であり、このような気の状態を説いている経典が『難経』です。」(『難経鉄鑑』)

『難経』とはどのような書物なのか。それを考える際に基礎となるのは、人間とは何か治療とは何かということに関する洞察です。人間に関わり治療処置を行うということを前提とした上で、『難経鉄鑑』では『難経』の位置づけを明確にしているわけです。

すなわち、健康な人の生命というものは、丸ごと一つの生命力ですっぱりとすきまなくおおわれているものである。その完璧な状態に少しでも充実していないところが起こると、病変となってあらわれる。そのような時には、病変が起こっている部分にその人の生命力を導くようにすると治すことができる。この生命力の状態をうかがい知る方法が脈診であり、その生命力の状態を説いているものが『難経』である。そのように『難経』という古典を位置づけて、実際の治療と結びつけて解説しているわけです。

それでは、その『難経』という書物はどのようなことが書かれていると考えたのでしょうか。上文に続く以下の文章に、そのことについて述べられています。

「『難経』はその八十一篇によって、一原の妙悟〔(みょうご)注:一原の原気についての深い理解〕を起しているのです。

そのため、その言葉の意味や内容は全て一気の玄要〔(げんよう)注:一原の原気そのものの深い理解〕に帰して考えていかなければなりません。

玄迪先生〔訳注:中島玄迪:「序」の筆者〕は、「『難経』は元気を説いた書物である」と語られています。この一言で『難経』を語り尽していると言えるでしょう。

」(『難経鉄鑑』)

『難経』は、その八十一難全篇が原気についての深い理解に基づいて書かれているので、それを理解するためには、原気についての深い理解をもって応じなければならない。こう述べています。そして、『難経』は原気を説いた書物である、と中島玄迪の言葉を引いて一気に定義しているわけです。

この文章には、書物からものごとを学ぶさいの読者の姿勢がいかにあるべきなのか、ということが表現されています。すなわち我々は『難経』の著者と同じように、原気について理解するのだという覚悟をもたねばならないということ。そして書かれていることが正しいかどうかを含めて、己の原気についての体験的理解をすりあわせていくことを通じてしか『難経』を理解することはできないということです。

私はここに、気一元として生命を見、その構造を理解しようとする一つの宣言を見て取ります。また、その原典と言えるものが『難経』であり、『難経』という書物はそのように読み解かなければならないのだという、高らかな宣言が行われていると読んでいます。

そしてそれは、文字の糟粕を乗り越えるために、生き生きと生きている人間そのものに立ち返って、その気一元の生命の方向から人間を見ていくこと、文字を読んでいくことが大切であるという、江戸時代の知のありようにまた思いを馳せることとなるわけです。

## ■ 古典を読む姿勢

現代中医学者である凌耀星がやっていることは、三焦という言葉の解説にすぎません。これは書物を読み解釈して教示する方法として一般的に行われていることではありません。けれどもその背後に、『難経』の作者とともに人間理解に立ち向かう、治療に立ち向かっていくという決意をみることはできません。

これに対して『難経鉄鑑』では、基本的に人間理解のために書物を読み、治療のために書物を読んでいます。そのため、文字の糟粕でしかない『難経』という書物が、人の生命の動きを表現し、人身の構造を指し示し、臨床に密着したものとして立ち現れてくるわけです。

先に述べた明末の医家の張景岳の読み方も、その基本は実は凌耀星と同じです。

張景岳はそれまでの医家ことに金元の四大家を厳しく批判しており、また何よりも医易の大家として有名です。医と易とが通貫するものとして景岳が考えている理由の一つには、全体観を保つということがあります。それは、『難経鉄鑑』を生みだした江戸時代の医家にも通じる概念です。けれども、そのような彼の三焦論でさえも『一元の気』がまだ表現されてはいません。これは『景岳全書』の以下の記載からも理解できます。

「一つの気が、先天的に存在している。これを名付けて太極という。太極が生生することを名付けて易という。

易の中に造化があり陰陽に分れる。陰陽の分れたものは休むことなく動く。剛と柔とが互

いに影響しあい乾坤ができあがり、さらに剥・復・夬・姤の群れが発生する。

初めに先天を得、次に後天を成し、気血は、ここに来源する。陰陽の気がしっかりしていれば、長寿を迎えることができる。陰陽という竜虎が飛騰する状態となれば、その家宅を失うことになる。」(現代語訳『景岳全書 伝忠録』〈保天吟〉 伴 尚志訳)

先天的に存在している一つの気のことを太極といい、これを易と景岳は呼んでいます。易というものは生生して休むことがなく、その中で造化作用が起こります。その造化作用とは、剛なるもの〔注：堅いもの・突き進むもの・矛〕と柔なるもの〔注：柔らかいもの・受け止めるもの・盾〕として互いに影響し合って、乾坤という天地ができあがります。そしてその場に森羅万象ができあがるわけです。このことを易では六十四卦〔注：ここでは剥・復・夬・姤で代表されています〕で表現されています。

その森羅万象の宇宙〔注：この宇宙という言葉も、時間である宙と空間である宇という言葉で成り立っています。〕の中で、先天的な形としての生命を得て、後天的な水穀の受納排泄作用が機能していくことによって、人身の大本である気血ができあがります。陰陽の気〔注：すなわちここでは気血〕がしっかりしていれば長寿となります。けれども気血がばらばらに暴れるような状態となると、家宅である生命を人は失うこととなります。

張景岳はこのように語っています。けれどもここでよく考えてください。これは宇宙の生成原理として易の概念を観念的に使用しているのではありませんか？この考え方は正しいのでしょうか？証明することも反証することもできない概念です。観念論的仮説ということになるでしょう。これは、景岳の当時もっとも進歩的な考え方であった、朱子学の理論です。万物が生成される基本的概念として、易の陰陽論を使用しているわけです。かの大才、張景岳であってもこの観念論から離れることはできませんでした。ここに張景岳自身の限界が表現されています。

ところが広岡蘇仙においてはこれが乗り越えられ、気血という陰陽で構成されているものとして身体を捉えるのではなく、「一元の生命」として人身を捉えなおして表現されているのです。その考え方に大きな隔たりがあるということが理解できるでしょうか。

実はこれは、一人広岡蘇仙という天才に由来するものではなく、江戸時代初期に発生したきわめて日本的な時代的な問題でした。このことを小林秀雄は、その『本居宣長』という書物の中で詳細に描写していますので、後に紹介させていただきます。

「その実際に対応して古典を読み砕く」(参考文献 8)という、古典を読む姿勢が横溢していた時代が日本には存在していました。元禄時代を中心としたその時代精神は、自由で反権威主義的な、知を愛し謳歌した人々がいた時代だったのです。後に紹介する岡本一抱は、この思想界の流れの中で数多くの古典の解説書を出版し、近世最大のブックメーカーと呼ばれています。

このような思想状況を私は、江戸時代初期の反知性主義と名づけています。反知性主義とは何か。それは、言葉を超えて存在そのものを理解せんとする志—心意気です。儒教にあつては、論語を中心として聖人である孔子そのものに肉薄しようとして文字を超えていきました。医学にあつては、人間の生命そのものを理解しようとして古典を超えて、気一元の身体観を育むまでにいたったわけです。

## ■ 広岡蘇仙にいたる師弟関係

広岡蘇仙にいたるまでの師弟関係を示しておきましょう。

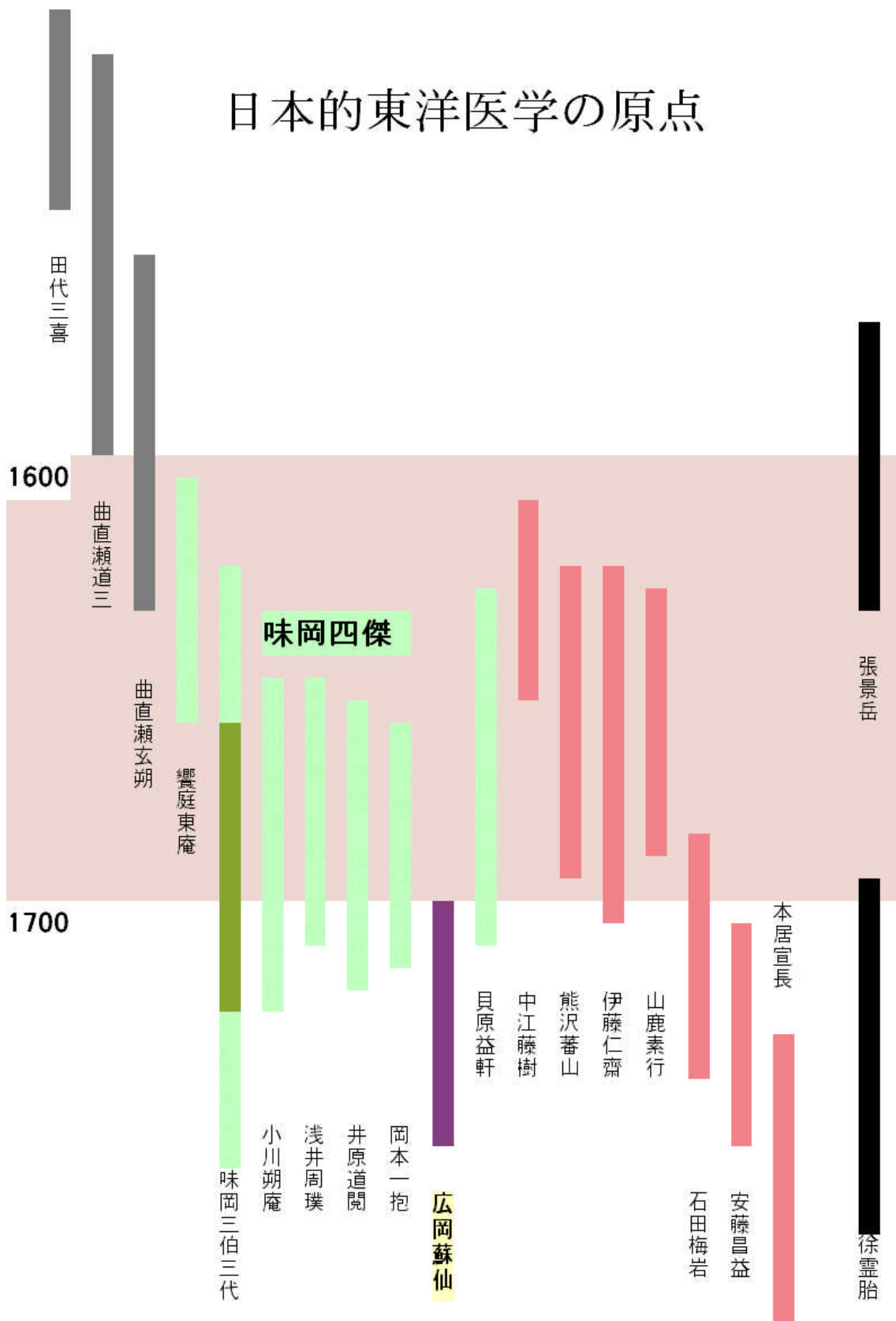
はじめりは田代三喜(1465年～1544年)です。彼は明に留学し医学を学んで帰国しています。関東に住んでいました。高名な永田徳本(1513年～1630年)は、田代三喜の弟子です。

曲直瀬道三(1507年～1595年)は京都の生まれですが、22歳の時に栃木の足利学校に入学し、24歳の時に、田代三喜の名声を耳にしてそこに弟子入りしました。13年後38歳の時京都に戻り実戦的な医術を行うこととなります(1545年)。翌年、啓迪院という医学校を設けています。そこでは多くの後学(800人～3000人)を養成し、東洋医学を広める基礎を築きました。

曲直瀬玄朔(1549年～1632年)は道三の甥で、後に入り婿となり免許皆伝されました。彼は道三をしのぐほどの実力があつたため、幕府にその措置から認められることとなりました。そのため曲直瀬家は江戸時代末期まで幕府の御殿医として力を持つこととなります。

饗庭東庵(1600年～1659年)は曲直瀬玄朔の弟子です。中江藤樹より8歳年上ですが、同時代の思潮—江戸時代初期の反知性主義に充分ひたっていたことでしょう。曲直瀬家の李朱医学を中心とした療法をあらため、寒涼派の説を採用しています。

# 日本的東洋医学の原点





味岡三伯は、饗庭東庵の弟子で、三代続いて同じ名前を名乗っていました。詳細は付録の味岡三伯考に譲ります。初代味岡三伯(1628～1661)は曲直瀬道三流の医学を饗庭東庵から学び、京都で開業し大いに繁栄していたということです。けれども33歳の時に、福岡への旅先で頓死してしまいました。それを嗣いで医学を講習したのは二代目味岡三伯(～1726年)ということになります。

この頃の京都には伊藤仁齋や山崎闇斎の塾などもあり、日本の知の中心地でした。全国から俊秀が集まり語り合い、それぞれが藩の運命を背負って、さまざまな塾へ通っていました。その中には、福岡の貝原益軒もいました。貝原益軒は、伊藤仁齋にも直接会い、山崎闇斎の塾にも通っていました。また初代味岡三伯と交流があり、その息子を一番弟子にして自身の著作の校正などの手伝いをさせてもいました。

時代を下りますが、青森の安藤昌益や三重の本居宣長なども京都で学んでいます。二人とも味岡三伯の系統の医学を学んでいます。味岡三伯医学講習所のようなものが京都にあったということなのでしょう。

二代目味岡三伯の弟子に四傑と尊称された人々がいました。小川朔庵(生没年不詳)・浅井周璞(1643年～1705年)・井原道閑(1649年～1720年)・岡本一抱(1654年～1716年)です。

岡本一抱は数多くの良質な古典の解説書を出版しています。確認できているものだけあげても、臓腑経絡詳解・十四経診解・病因指南・格致余論診解・奇経八脉詳解・一抱涉筆・和語本草綱目・鍼灸拔萃大成・医学至要抄・医学三蔵弁解(1700年)・医方大成論和語鈔・方意弁義・阿是要穴・難経本義診解(1703年)・素問入式運氣論奥診解・医学入門診解・医学講談・医学切要指南(1714年)・和語医療指南・経穴密語集(奇経八脉詳解を改題)・日用医療指南大成・医学正伝惑問診解・溯源集倭語鈔・黄帝内経素問診解・校正引経訣など、大量です。ちなみに彼は武家の出で、近松門左衛門の1歳年下の弟でもあります。

これらを通じて彼は秘伝書として1700年に『医学三蔵弁解』を磨き出しました。ところがその14年後『医学切要指南』の中で、それをさらに塗り替えるような三焦論を自ら書き出版しています。真理の探究に向けて、自分の到達点でさえも批判的に捉え、それを平然と乗り越えていくわけです。その意志の強さ—真理を希求する情熱は、我々がこれからの東洋医学を築いていく上で学ぶべき姿勢であると言えます。

井原道閑には『医学三蔵弁』という著書があり、岡本一抱より5歳年上です。ですので、岡本一抱の『医学三蔵弁解』は、井原道閑のこの『医学三蔵弁』を解釈した書物ということになるかもしれません。けれども『医学三蔵弁』が現存しないためその真実は明らかで

はありません。

『難経鉄鑑』の著者、広岡蘇仙(1696年～没年不詳)が師事した難経の講釈者「井原関」という人は、この井原道関のことでしょう。先にも書きましたが、広岡蘇仙は3年間この井原道関に学び、13年後(1729年)に『難経鉄鑑』を完成させています。江戸時代初期の、「その実際に対応して古典を読み砕く」という姿勢が横溢していた時代精神を背景にして『難経鉄鑑』は産まれたわけです。

## ■江戸時代の反知性主義

この江戸時代の反知性主義はどうして発生したのでしょうか。

江戸時代の初期。朱子学を公的な学問—官学とし、安定した統治のための哲学が幕府によって広められました。

この背景にあったものは、

- ・長く続いた戦国時代のために下克上の気風がはびこったこと、
  - ・まだ残る多数の浪人を社会に吸収しきれなかったこと
  - ・キリスト教による精神的な侵略によって、反幕府的な大規模な反乱が起こったこと
- 等があげられます。

朱子学の導入は結局、この時代の思想的な無秩序状態に対して、支那大陸からの借り物ではあったが統治哲学を導入し、社会の思想的な安定を図る目的があったといえます。このことを、徳富蘇峰は林羅山一族を「学問上の小幕府と見るべきものであった。」として、以下のように表現しています。

「林家(りんか)[注:林羅山一族]は、幕府と終始して、御用学者となり、御用学問の本山となった。而して異学・異説の制禁は、いずれも皆この本山よりして、もしくはこの本山を經由して、出で来たった。」(『近世日本国民史』徳川幕府思想篇 徳富蘇峰著 講談社学術文庫 昭和58年第1刷 88p 上掲文も同じ)

江戸時代初期の基督教の処理から始まった治安維持の努力は次に、浪人達のもつさまざまな思想の処理へと向かっていくこととなります。林羅山は、同じ儒教ではあっても、朱子学に反旗を翻した人々を「異学」と判断し、批判し、弾圧していきます。そしてそのレッテル貼りとして、「基督教」を用いたのです。(同上 92p)このあたり、自分の意見と異なるものにレッテルを貼って排除しようとする、現代の狭量な人々と類似しています。レッテル貼りは学問の自由を奪う行為であるということは、記憶しておいてよいでしょう。

けれどもこのような官学の動向に対して、学問そのものを愛し、己に照らして探究する人々が起こりました。これを私学と呼んでいます。この背景にあったものとしては、

- ・明が滅び、支那大陸の統治学問としての朱子学の正統性が疑われたこと
  - ・明の遺臣が来朝し、その「志士の気分」(同上 317p)に、当時の学者達が感化されたこと。
  - ・戦国時代が終わり、武士に時間的余裕と金銭的窮乏が訪れたこと。
  - ・武士の職業として文武両道が大衆に広められたこと。
  - ・基督教による侵略に対抗するため日本的な知の構築が必要になったこと。
  - ・官学として朱子学が取り上げられたが、本家の明が滅亡したためその学問の実用性に対して疑念が湧いた
  - ・朱子学の観念的な部分が実践的な学問を求める日本の風土に合っていなかった
  - ・そのため陽明学が実用的なものとして私学の人々によって学ばれた
  - ・徳川綱吉によって学問が奨励され、大衆化がさらに促進されたこと。
  - ・参勤交代によって、知の拡散が行なわれたこと。
- などがあげられます。

これまでの時代の日本における知識を独占していたのは、僧侶でした。朱子は仏教を舌鋒鋭く批判していましたが、その儒教でさえも学んでいたのは僧侶でした。高位の者、僧侶、専門者の家系に知が独占されており、大衆化してはいなかったと言えます。そのため、田代三喜が医学を学ぶ際、独占されている知を学ぶことはできず、明に留学しなければならなかったわけです。

戦国時代の終了と共に、この知の大衆化は一気に広まりました。その中で実用に供する知を求めて医学においても儒教においても学問が深まっていきます。このことを私は求道の知の系譜と呼んでいます。

後世の学者達は彼等をレッテルを貼って分けることによって安心しています。けれども、求道者というものはそのレッテルを軽々と越えていくのです。どうしてなのでしょう。その理由は、彼らが今手に入るあらゆるものから学ぶためです。真実を求めて探究するのですから当然に流の学問などという切り分けはありません。ただそこに真実はあるのか、あるのであればそれを実践のなかに応用し活用していこう。間違っているならばただ

それを実情に合うようにあらためていけばよい。

これが求道者の求めるものです。そして現代の我々も、彼等の求道の精神をこそ学ばべきでしょう。後世の学者は、彼等が語った言葉を教訓にして分類しているがそれが違うのです。大切なことは彼等の学ぶ姿勢なのです。言葉を紡ぎ出す前のその姿勢、学問をするその姿勢そのものが学び取るべきものなのです。

このような時代の大きなうねりの始まりは、近江聖人—中江藤樹によると言われています。彼は、求道の知の道を歩む先駆者でした。

## ■ 近江聖人：中江藤樹（1608年～1648年）

林羅山の一族が江戸にあって小幕府として思想界をにらみをきかしている同じ頃、新たな思想の萌芽が琵琶湖右岸の近江において生まれていました。その人は村人から近江聖人と尊称されており、名を中江藤樹といたしました。

小林秀雄は林羅山を官学の代表者、中江藤樹を私学の開拓者として両者を「明瞭に対立する考えを抱いていた」と評しています。

「藤樹は、儒家の理想主義或は学問の純粋性を、羅山は、儒官の現実主義或は学問の実用性を、はっきり表明した。この二つの道、当時の言葉で言えば、この二つの血脈は、長く跡を引くのである。」(参考文献 8)

中江藤樹の学問を、「慶長の頃から始った新学問の運動の、言わば初心」(参考文献 8 : 95p)であると小林秀雄は考えました。「絶えず発明して、一般人の生きた教養と交渉した学者達は、皆藤樹の志を継いだと考えられる」とまで述べています。

慶長年間というと、江戸幕府が開かれて頃であり、慶長年間は 1615 年で終わっていません。中江藤樹はまだ 7 歳ですから、さすがにこれは言い過ぎでしょう。小林秀雄が何を言いたかったのかというと、戦国時代が一応の終わりを迎え、天下泰平の徳川 300 年

の基礎が築かれた頃、新学問の運動が起こった。その「初心」というのはすなわち、核となる志を表現しているものが中江藤樹であったということです。

そしてその初心とは、机上の学問ではなく生きた学問—実際に使える学問であった。自らの心を鍛えるだけでなく、世の中の役に立つ学問が、これ以降、工夫されていくこととなった。と、そういうことを述べているわけです。

このような活学としての学問とは何か、これを己に問う時、沢田健が「書物は死物なり。死物の古典を以て生ける人体を読むべし。」(参考文献 2 11p )と述べた、それと同じ魂がここに宿っていることが理解されるでしょう。飾りとしての学問ではない、実際に即して使うために学問はあるのです。

「彼の学問の本質は、己を知るに始まって、己を知るに終るところに在ったと言ってもよい。学問をする責任は、各自が負わねばならない。真知は普遍的なものだが、これを得るのは、各自の心法、或は心術の如何による。それも、めいめいの「現在の心」に関する工夫であって、その外に、「向上神奇玄妙」なる理を求めんとする工夫ではない。このような烈しい内省的傾向が、新学問の夜明けに現れた事を、とくと心に留めて置く必要を思うのである。」(同上 97p )

中江藤樹は学問を、己を究めることに用いました。自分自身が理解することができる範囲で学問するという、誠実な態度を取ったのです。彼は語っています「学問は心のけがれを清め、身のおこないをよくするを本実とす」と。進士に合格して官僚になるために学問をするのではない。見えや格好をつけるために学問をするのではない。ただ自らの心の穢れを祓い浄め、自分自身の進むべき道を明らかにするために学問をしたのでした。

このことは、朱子学が得てして観念的な宇宙論に走り、「向上神奇玄妙」なる理を求めようとする事と、大きな違いがあります。空論を離れて、己を極めんとする中江藤樹の心は、1644年に陽明学と出会うことによってさらに開拓されました。彼が求道の末に朱子学と決別する姿を小林秀雄は以下のように描写しています。

「藤樹の独創は、在来の学問の修正も改良も全く断念して了ったところに、学問は一ったん死なねば、生き返らないと見極めたところにある。従って、「一文不通にても、上々の学者なり」(『翁問答』改正篇)とか、「良知天然の師にて候へば、師なしとて不苦候。道は言語文字の外にあるものなれば、不文字なるもさはり無御座候」(『与森村伯仁』)という烈しい言葉にもなる。学問の起死回生の為には、俗中平常の自己に還って出直す道しかない。思い切って、この道を踏み出してみれば、「論語よみの論語しらず」という諺を発明した世俗の人々は、『論語』に読まれて己を失ってはいない事に氣附くだろう。「心学をよくつ

とむる賤男賤女は書物をよまずして読なり。今時はやる俗学は書物を読んでよまざるにひとし」(『翁問答』改正篇)(参考文献 8 99p ~ 100p)

この中の「一文不通にても、上々の学者なり」という言葉は何を意味するのかというと、文字を知らなくても、書物をまったく読んだことがなくても、立派な学者であるということの意味しています。どうしてなのでしょう。

その理由は彼等が「良知天然の師」についているからです。「良知天然の師」とは、当たり前の生活をていねいに行っていくことによってえられる常識、日々の生活の中で工夫することによって真実をつかんでいこうとする学問の姿勢を意味しています。道を歩むということはまさにこのことです。ですから学問において師がいなくても問題ではない。本当の道というものは、言語や文字の外にあるものだからです。

言語や文字はまさに道がそこにあるということをさし示しているだけで、道そのものではないということ、孔子の事績である『論語』を文字で読んだとしても、孔子の心の理解にはいかない。孔子と同じような聖人になろうとするのであれば、自らの心に道を問い、その道標として論語を読む他はない。「心学」とあるのは、中江藤樹の求道の学問のことです。彼自らがそう称しています。後に陽明学が中心となり、陽明心学とも呼ばれるようになります。求道の学問をする藤樹近隣の人々は、書物を読まなくてもそれを理解している。けれども世間の儒者面をした人々—これを藤樹は俗学と軽蔑しています—は、書物を読んでも読んでいないのと変わりはない。身についた道徳、身についた生き様になっていないからです。

この烈しい志。これをこの文章の冒頭の反知性主義の言葉と並べてよくかみしめてください。「浮き世離れしたなまっちょいエリートの机上の空論より、現実に根ざした一般庶民の身体感覚に根ざす直観こそが貴いという考え、それこそが反知性主義の基盤だ。」現代のアメリカの知を形作った反知性主義は実は、江戸時代初期の日本にも存在し、その後の日本民族の精神を養ってきたと言えるのです。

このような中江藤樹の反知性主義の中身は、己自身を知ること—無知である己自身を知るといふところにありました。中江藤樹の求道の知の覚悟の底、近江聖人を聖人たらしめた近江の民衆の心の底にはおそらく、日本の伝統的な知の深い海流—文字のない時代に成立していた神道の伝統があったことでしょう。

文字をこえた理解をする。文字の糟粕に惑わされることなく真実をつかみ取る努力をしつづける。ここにこそ初心の位置があります。古典を学び始める原点がここにあるのです。そしてそれは、真の古典である目の前にある患者さんの身体から言葉を読みとるための、臨床家としての我々の初心の位置であると言えるでしょう。

## ■ 求道の儒者 熊沢蕃山(1619年～1691年)

中江藤樹の弟子に熊沢蕃山がいました。世間では陽明学者というレッテルが貼られています。当人はもちろん求道の人なので自在にあらゆる処から学んでいます。藤樹に師事し学問の喜びを知ります。そして乞われてある藩の財政の立て直しを行い大成功し、全国の藩から引っ張りだこになります。けれどもそこを林羅山に疎まれて、異学を行う者として弾圧を受けることとなります。そのような熊沢蕃山の学問をする姿勢がいかなるものであったのか、我々がそこから大いに学ぶところがあると思います。

「愚は朱子にも取らず、陽明にも取らず、ただ、古の聖人に取りて、用い侍るなり。」(集義和書)

愚というのは自身を謙譲して述べる時に使う自称です。熊沢蕃山は自身、朱子学を取りはしないけれども世の中でいうように陽明学も取りはしない。ただ古の聖人にしたがって、その行跡を用いているだけだと述べているわけです。もちろんそこにあるものは、文字をこえて古の聖人の心にそのまま従っていくのだという烈しい心です。道を求めるこのような烈しい志を、林羅山は耶蘇(キリスト教)のレッテルを貼り、邪学であるとして排斥しました。朱子の言葉を言葉通りに信じなかったというただそれだけのために。

熊沢蕃山のこのような学問する姿勢を徳富蘇峰は、「彼は研学審思の余、朱・王を兼ね取りて、朱・王の上に超越し、直ちに聖人をもって、その師となさんと心掛けた。その抱負の大なる、もって知るべし、されば彼を王陽明学派に加うるは、決して彼の本意ではあるまい。彼は陽明から入っても、陽明は門戸に過ぎなかった。彼は決してその師中江藤樹に負(そむ)く者ではなかった。しかも決して藤樹を、盲目的に信仰したるものではなかった。」(参考文献7 111p)と表現しています。

弾圧といっても、役職を解かれたり見張りを付けられ自由に行動することを禁じられるといったことであって、生命を奪われることはありませんでした。そのため熊沢蕃山はその晩年まで学問を楽しみ続け、道を求める者たちの目標でありつづけました。

## ■ 武士道を説いた—山鹿素行(1622年～1685年)

また、同時代、8歳の頃に、四書・五経・七書・詩文の書を読み記憶し、11歳の時には人々に教授していた天才が会津に誕生していました。その名を山鹿素行(1622年～1685年)といいます。彼は後に、「平和の時代の指導者道徳としての武士道」を唱えることとなります。中江藤樹と直接の関わりは見えませんが、その求道精神の烈しさは「反知性主義の時代の子」であると言って間違いありません。

そのような彼の学問の姿勢を徳富蘇峰は以下のように表現しています。

「彼は実に舜何人ぞ、我何人ぞの氣象もて、漢唐・宋明を排して、直ちに周公・孔子の道統に接せんと心掛けた。彼の造詣の如何は、しばらく措き、その意気の卓犖(たくらく:他より抜きんでて優れている)なる、実に前に古人なきにちかかった。而してその結晶は、いわゆる一部の『聖教要録』となった。」(同上 195p)

山鹿素行は、古代の聖人として崇められていた舜がどれほどのものか、自分がどれほどのものかと、自身を舜と並ぶもの、いや、自身が舜をこえるものとなろうとするほどの気迫をもっていました。そのため、聖人の事績や言葉を解説した書物およびその注釈書が書かれた時代である漢以降の時代の言葉を拒否したのです。そしてまっすぐ周公・孔子といった古代の聖人の道統に接しようとして心掛けていました。堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子といった儒教においては聖人として崇められた人々に直接学び、その道統に連なろうとしたのです。そのために言葉をこえて聖人の心に接しようと努力したわけです。それが成功しているかどうかということはさておき、彼のような烈しい志は、前人の未だ持ち得なかったものではないだろうか、徳富蘇峰は述べています。そして烈しい志は、『聖人要録』という書物となって結晶しています。

この山鹿素行は後に、日本を中国と呼び、その文物の他国より優れていることを記して『中朝事実』を出版することとなります。これは彼の求道の果て、真実は何許にあるかと追求し続けた果てにたどり着いた、日本国の姿でした。そしてその書物が朱子学の概念をこえていたため、異学を行う者として弾圧されることとなりました。

この山鹿素行の思想の基本は、

「万物の根本は無物であり、空である。無声、無臭、寂然として不動なる所を考へ、これを以て、万物の始めとし、兵法の源とするのである。



「是れを兵源無物の所と謂ふ。即ち対偶なし、対偶なければ敵なし。之れを無為と謂ふ」  
即ち兵法の極致は、兵を用いざることにある。これを「無為無敵」にあるというのである。  
」（『山鹿素行』25p 山鹿光世著 錦正社 平成十一年）

という、絶対的な一に立つというものでした。ここにおいて彼は山鹿流兵法を立てまた平和の時代における武士道のあり方について提言を行っていました。

言葉の使い方や万物の根源を「一」と喝破するところには明らかに禅の影響が見て取れます。彼は自らも禅の修行を行い、また当時高名な禅僧であった沢庵和尚と直接交流がありました。

「素行の禅学修行は、…(中略)…現世即ち今生に於て、大自在、安楽の悟りを得られるという、禅の法語に心を惹かれて行った」（『山鹿素行』29p 山鹿光世著 錦正社 平成十一年）

「そしてまた、万物の本質を虚無と観ずる、老子、荘子の思想に共鳴していたので、人の慾望を心の迷いとして否定する、禅の仏法とも共通するものと感じて居り、更に慈母の様に敬い慕っていた、祖心尼の影響もすくなくあつたであろう。特に祖心尼と親交の篤つた、沢庵禅師の力の大きかつたことも、それを物語る沢庵より素行宛ての消息をみても、十分に窺えるのである。」（『山鹿素行』29p 山鹿光世著 錦正社 平成十一年）

沢庵和尚は柳生宗矩にあてて剣の奥義を解き明かし『不動智神妙録』を著し、剣禅一如を説いた僧侶です。

## ■ 商人に道を説いた石田梅岩(1685年～1744年)

少し時代を降り、身分も武士ではなく商人ですが、後世に大きな影響を与えた人に石田梅岩がいます。彼はあるべき商人の道を説いたことで有名です。けれども彼がしていたことは、禅の悟りを商人道に応用したに過ぎません。そしてその際の言葉として儒教の言葉と身近なたとえを用いて、誰にでもわかりやすく解き明かしていきました。

それは石門心学と呼ばれ、現代でもその教場は存在します。京セラの稲森会長などもその学徒です。最盛期の江戸時代末期には全国に240ヶ所以上もの教場があったということです。

石門心学は現代の我々にはただ商道德を説いた人のように思われ、生きて行く際の道徳的な指針を言葉で与えた人のようにしか受け止めることができていません。けれども石田梅岩はただその身分に従って商道德を説いたままで、彼が武士であれば武士道を説いたことでしょう。

**「梅岩は、生活の体験から生まれ、行為の実践に終わる、生きた学問を求めた。かれは、まず、「心を知るを学問の初」としたが、それは、体験を反省することが、学問の初めであるという意味である。生の体験は心においてのみ認識せられる。かれの学問は、心に問い、心において生の体験を反省することによって、形成せられた。」(石門心学の経済思想:竹中靖一 1998年増補第二刷:ミネルヴァ書房)**

言葉を越えたこのリアリティの探究精神は、現在の一元流鍼灸術においても深く共有するものです。そしてそれが、中医学や古典といった言葉の集積を乗り越えていくための、覚悟、姿勢であるということを石田梅岩は教えてくれています。

彼の姿勢は、江戸時代初期の時代精神でもあった反知性主義、道を求めてリアリティを探究していく求道の心の結晶であるということもできるでしょう。

## ■ おわりに

われわれが彼等から学ぶべきことはなんなのでしょう。ただ学問的な弾圧に反抗し、自説を曲げなかったということでしょうか。

それだけではありません。

彼等、道を行う者は、自説さえも客観視して、内に自己に照らして納得できるものを掴むことができるまで、徹底的に学問と思考を極めていきました。

そのため、朱子をこえ、直接聖人の魂に触れようとしたのです。真実はどこにあるのか、文字を信じこむのではなく、言葉を超えた自身の存在をかけて探究し続けたのです。

その烈しい探求心、真実をつかむまで止むことのない志こそが我々が学ぶべきものなのではないでしょうか。

古典に書かれているからそれを信じるわけではない。事実を照らしてそれが真実か否か検証しつづけなければならない。『黄帝内経』を書いた古人の心を心とするということは、その文字を信じるということではない。それを言葉として遺した古人の思い—真実を探求するという道心こそを学ぶべきである。その心を持って臨床にのぞみ、臨床の中から古人が行ったように、一つ一つ言葉をすくい上げ記述していく。

この姿勢があって始めてわれわれは、文字の糟粕を乗り越えることができます。時代の呪縛から解き放たれ、事実そのものの大地に足をおろすことができます。これこそがわれわれの目指すところ、現代の東洋医学実践者の地平であるといえるでしょう。

沢田健は「書物は死物なり。死物の古典を以て生ける人体を読むべし。」と言いました。その中身は実は、古典の発祥の地こそ人体である、人体を読むことこそが本当の古典を解説する道である、というところにあります。そしてこの「言葉以前の場」こそが実は、汗牛充棟たる古典と呼ばれる書物の山を古人とその伝承者が築いた、その始まりの場所でなければなりません。

われわれが行うべきことは、この古典の発祥の地に再び裸で立ち、言葉にする以前に学び、湧き上がる思いが出るのを待つということです。そこにありつづけることによって発せられる呻くがごとき言葉の結晶こそが、未来において古典と呼ばれるものとなります。

われわれはこの発語の苦悶のまっただ中に立つことができることを、悦びとします。何故ならこここそが古典発祥の地であり、これからの医道が発祥する場所だからです。

我々にとっての課題は、『難経』などの古典がどのような書物なのかと、評価判定することではすでにありません。『難経』などの古典をいかに読むのかというところにあります。その著者のわき上がる真実への希求を共有するところにあるのです。

現代日本の「学者」達が使う反知性主義は、知性を捨てて本能に赴くということを指しています。しかし、真の反知性主義とは、知性の根拠である言語を疑い、言語を越えた真実の世界に立脚して知性を顧みるところにあります。

文字の糟粕を超えて患者の身体から、真の古典を読み取る。始まりはここにあります。ここにおいて言葉を越えた真実を掴む努力をしなければなりません。

このたゆむことのない努力があって始めて、東洋医学が古典の呪縛から放たれ、人類の未来に貢献する**「鍼灸古道の真価を全世界に顕揚し、失われたる東洋医道の名誉を回復し、西洋医学の誤りを正して、以て天下蒼生をして生の楽しみを享受せしめんとす」**(2:『鍼灸真髓』10p)ものとなるでしょう。

## ■ 参考文献

- 1) (<http://cruel.hatenablog.com/entry/2015/08/20/185544>  
反知性主義 1: ホフスタッター『アメリカの反知性主義』知識人とは何かを切実に考えた  
名著 山形浩生の「経済のトリセツ」)(Accessed September 2, 2015.)
- 2) 代田文誌著: 鍼灸真髓, 医道の日本社, 第 13 版, 昭和 57 年
- 3) 伴 尚志現代語訳: 難経鉄鑑, たにぐち書店, 第 2 刷, 2009 年
- 4) 伴 尚志現代語訳: 景岳全書 伝忠録, たにぐち書店, 2014 年
- 5) 伴 尚志現代語訳: 医学三蔵弁解, たにぐち書店, 2010 年
- 6) 伴 尚志現代語訳: 医学切要指南, たにぐち書店, 2010 年
- 7) 徳富蘇峰: 近世日本国民史 徳川幕府思想篇, 講談社学術文庫, 昭和 58 年
- 8) 小林秀雄: 本居宣長 上 改版, 新潮社, 2007 年
- 9) 凌耀星著: 難経校注
- 10) 石門心学の経済思想: 竹中靖一 1998 年増補第二刷: ミネルヴァ書房

## ■ 付：味岡三伯考

味岡三伯というのは、味岡の四傑を育てた人で三代続いた医学講習所の代表者の名前です。味岡の四傑というのは、小川朔庵・浅井周璞・井原道閑・岡本一抱の四人のことを指します。『鍼灸真髓』の中で沢田健によって絶賛されている『難経鉄鑑』を書いた広岡蘇仙はこの井原道閑から直接『難経』を教授されています。岡本一抱の『医学三蔵弁解』で描かれている三焦論が、六六難の図の原点であると考えられます。

いわばそれまでの朱子学的な陰陽五行論を、陽明学的な気一元の生命観に基づいた陰陽五行論へと変容させた、中心グループであるとされます。

初代味岡三伯(1628 ~ 1661)は曲直瀬道三流の医学を饗庭東庵から学び、京都で開業し大いに繁盛していたということです。けれども33歳の時、妻の実家である筑前藩(太宰府を擁する地域で現在の福岡県西部)を訪れている時に突然客死してしまいました。その頃その妻は妊娠中で、三ヶ月後に出産しています。(『貝原益軒』井上忠著69p)この初代味岡三伯の子が貝原益軒の大量の著作を浄書するなどして支えていた竹田春庵(1661 - 1745)です。貝原益軒の大量の出版を縁の下で支えていたのが味岡三伯の実の息子であり、大量の医学諺解書などを出版した岡本一抱子の師が二代目味岡三伯であるということは、とても興味深いことです。双方ともに当時湧き起こった書籍出版の大波に乗った人であり、医師であり、大学者した。

当時の筑前の三代目の藩主(黒田光之 1628 ~ 1654 ~ 1707)の生母はまた、初代味岡三伯の従兄妹でもありました。この黒田光之は貝原益軒(1630 ~ 1714)を重用したことで有名です。貝原益軒も始めて京都を訪れた時には初代味岡三伯の下を訪れています。奇縁と言わなければなりません。

初代味岡三伯の死後、どのような経緯か定かではありませんが、味岡三伯を襲名した二代目がいます。上にも述べた味岡の四傑を育てたのはどうやらこの二代目です。京都には味岡三伯の師匠筋にあたる曲直瀬道三系列の啓迪院も医学講習所としてありましたから、それと張り合うような形で医学講習所を運営していたことになります。

この二代目味岡三伯は1726年に死去します。1732年に青森から京都に出てきた安藤昌益(1603 ~ 1762)は、三代目味岡三伯に師事しています。(安藤昌益資料館 <http://www.npo-cross.jp/shoeki/nenpyou-contents.html> による 2016/03/24)

また本居宣長(1730 ~ 1801)は、味岡の四傑の小川朔庵の弟子堀元厚( 1686 ~ 1754 )の晩年、亡くなるまでの一年間だけその塾に入門していました。本居宣長は、堀元厚が亡くなった後、京都のほかの医学教習所で学んでいます。ということは、この時期にはおそらく味岡三伯の医学講習所はなくなっていたということなのでしょう。